

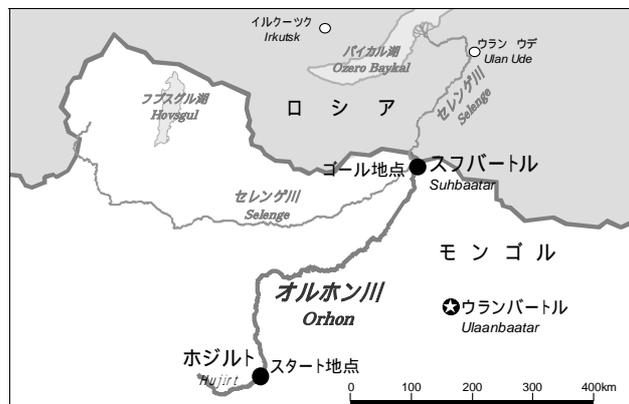
探検部の男子2名がオルホン川(モンゴル国)を航行

草原の国に流れる大河 約800キロを手漕ぎボートで1カ月
～日本人未踏の地でモンゴル人と川の文化の再発見を目的に～

今年の夏、関西大学の文化会クラブ「探検部」の市岡慎也さん(社会学部3年次生)と片岡賢佑さん(工学部2年次生)が、モンゴルの中央部を北上して流れるオルホン川の約800キロメートルを約1カ月間かけて手漕ぎボートで航行しました。

オルホン川は、モンゴル中心部の山間を源流として、ロシアとの国境手前でセレンゲ川と合流します。全長が約1,200kmにも及ぶ大河です。これまでオルホン川を下った日本人についてほとんど聞いたことがなく、われわれにとっては馴染みのない“未踏の地”といえます。

彼らにオルホン川の航行目的とモンゴル人との触れ合い、苦労話などを聞いてみました。



【この件に関するお問合せ先】

関西大学 総合企画室広報課 / 川瀬 北谷

〒564-8680 大阪府吹田市山手町 3-3-35 TEL:06-6368-0075 FAX:06-6337-7078

<http://www.kansai-u.ac.jp>

1. 日本人未踏の地でモンゴル人と川の文化の再発見が目的

オルホン川は人の手が加わっていない、私たちにとって『憧れの川』です。これまで日本の川の流域で出会った人々から、昔の川を懐かしむとともに、大きなダムなどの人工物がある現在の川を嘆く声が聞かれました。

こうしたなか、モンゴルに美しい大河があると知り、その川を通して草原の国を眺めてみようと考えました。モンゴルは、川の文化が希薄といわれていますが、自らの目を見て、現地の人と触れ合うことで、モンゴルの川の文化を再発見できるのではないかと考えました。

2. いきなりの“ろ過器”故障。位置確認用のGPSも紛失

8月8日、スタート地点は、山間の町・ホジルト。ゴムボートと組み立て式ボートの2つのボートで、航行を開始しました。

飲料水は、ろ過器で川の水をろ過して飲んでいましたが、2日目に故障。持っていたペットボトルと砂利で簡易ろ過器を作り、ゴールまで自作のろ過器で川の水をろ過、煮沸して飲料水としました。また、位置確認用のために持参したGPSを3日目で失くしてしまい、不安だったことなど、苦い思い出もたくさんあります。



3. ヤギのごちそうで生きることの真剣さを学ぶ

モンゴル人との交流で感じたことは『温かさ』で、彼ら遊牧民は、来訪者をもてなす文化を持っています。途中の村で泊めてくれた鉄道員の家では、歓迎の意を込めてヤギを1頭、目の前でさばいてごちそうしてくれました。初めての経験で驚きましたが、肉や内臓はもちろんのこと、血の一滴さえも無駄にせずに食べるその姿に、生きることの真剣さを学びました。

4. 地元メディアに珍しがられたボートや筏

特に印象的だったのは、オルホン川を下る前に現地のテレビ局から取材を受けたことです。取材の理由は、「800kmも川下りをする外国人がいる」という珍しさからでした。

実際、川の近くにゲルを作って生活している人々でさえ、ボートや筏の1艇すら持っていませんでした。魚釣りはしても、輸送する手段がないことから、日常的に食べる習慣はありません。また、この厳寒の地では川の表面が凍ってしまうため、川流域で暮らす彼らにとって、川は飲料水や洗濯などの生活に必要な水を調達する場としての認識にとどまっているようです。

～この探検を終えて～ 涙が出るほどおいしかった「おしろこ」

今回探検してきた2人に聞いたところ、「常に空腹との戦いで、途中で熱が出ていたときに、日本の家族に電話しても心配かけまいと『元気にやってるよ』と言わなければいけなかった時が最もつらかった。でも、本当にいい経験ができたし、今回の体験をとおして感じた事などをたくさんの人に伝えられればと思います」ということでした。

また、「川下り最終日に、日本から持参したインスタントのおしろこを食べたときに、涙が出るほどおいしかった」と二人は口をそろえて話していました。

関西大学探検部 モンゴル・オルホン川航行の主な概要

期 間 : 2005年8月2日(火)～9月14日(水) 航行前後の準備期間を含む

場 所 : モンゴル国 オルホン川(ホジルト～スフバートル)約800km

探 検 者 : 関西大学探検部 市岡慎也(社会学部3年次生)、片岡賢佑(工学部2年次生)

航行手段 : ゴムボート1艇と組み立て式ボート1艇(いずれも手漕ぎ式)

行動スケジュール

8月2日	関西空港出発 北京空港到着	北京泊
8月3日	北京空港出発 ウランバートル到着	ウランバートル泊
8月4日～6日	ウランバートルにて装備購入、大使館訪問、旅行社訪問、現地連絡本部訪問、補給地連絡	ウランバートル泊
8月7日	スタート地点ホジルトへ	ホジルト泊
8月8日～13日	航行(ホジルト～オルジート) ハラホリン通過	テント泊
8月14日	オルジートにて補給物資受け取り	
8月15日～19日	航行(オルジート～オルホン1) 崖(最狭部)通過	テント泊
8月20日	オルホン1にて補給物資受け取り	
8月21日～28日	航行(オルホン1～オルホン2) オルホンツール通過	テント泊
8月29日	オルホン2にて補給物資受け取り	
8月30日～9月4日	航行(オルホン2～スフバートル) オルホン3通過	テント泊
9月5日	ゴール地点スフバートル到着	スフバートル泊
9月6日～13日	ウランバートルへ 帰国準備	ウランバートル泊
9月14日	ウランバートル出発 北京空港到着 北京空港出発 関西空港到着	

関西大学 探検部の概要

部 員 数 : 7名(男子6名、女子1名)

創 設 : 1958(昭和33)年

主 な 活 動 : 沢登り、シーカヤック、川下りなど 年5回合宿(4月、8月、11月、12月、2月)

特 記 事 項 : 2000(平成12)年に当時4年次生の男子部員がアマゾンで1週間にわたり樹上生活

今後の予定：来年8月、片岡君を中心に3名（男子2名、女子1名）で、アラスカでの川下りを予定